16分钟

(員動総神精民婦) !!に後続は等我 !に線戦は士兵 メ

宰主★郎路生麻



號一十第 卷五十第 行 發 日 五 十 月 每

行發社誌雜柳川







大阪道修町和町卵助商店



といふのがあつた。僕は成程

路郎師が

も人の子プラスなりゅ(筑川

景」で拔いた句に〃謹嚴の彼 「川柳評釋都會風 るわけでもなからうと考へて ふ二重人格の持主であるから にない。人間は誰でも斯ろい はしても非難する資格は吾々 ゐる。 あべ・さだ事件に 登堪 合、人の子プラスとして同情 て、その職掌を離れてみた場 した中京商業の校長さんだつ て一でない人間がさら澤山居

辿る一途にあつた教會に聖靈 牧者の使命を帶びて片田舎の た。K學院の神學部を卒業し は熱心なクリスチャンであつ を告げた。僕は彼の轉機の理 め得たし、彼の赴任は衰微を 牧師以上に教會員の信望を蒐 された。當時彼はその教會の ある教會へ傳道師として任命 上阪して僕に傳道事業の揚棄 したのである。所が突然彼は バルが勃つた噂さへ僕は耳に の雨を降らし、やがてリヴィ

7

眼

٤

H 濫 高

ギ 3

僕の友人神尻色平君(假名)

推薦したりして僕と一緒に働 の世話、日曜學校の先生にも のためであつた。 信者を問はざる社交のうまさ と火を吐く辯舌と、信者、未 してきたのは彼の熱烈な祈り 漸く教會全體がある活氣を早 て僕の遠く及ぶところではな いた。何といつてもクリスチ 傍傳道や、聖書研究や祈禱會 師にも紹介し、日曜の晩の路 公會の某教會に連れ立ち、收 の籍を入れてゐた長老派、聖 在中の彼を誘つて、その頃僕 由を深く訊ねるでもなく、 い。まづ青年會が活潑になり、 ヤンとしては彼は玄人であつ

中が例の如く元關に出てきた る。―案内を乞ふと其家の女 親しい女性の家を訪問した。 を終へてから彼を伴ひ、僕の かける間さへない程に……。 引込んでしまつた。僕が驚を 御馳走まで招ばれ、二時近く 未知の家訪れるあの遠慮深さ 彼は平然として僕の斜め後で 神尻君を瞥つと視るやみる が、ふと僕の後に立つてゐる まで面白く遊んで辭した。そ が出てき、二人を奥に通して ちに入れ代つて其家の女主人 を恃して立つてゐた。そのら 怪訝に思つて神尻君をみると く 蒼白になり、慌て」奥に その知人一家は未信者であ 或る日、安息日の午前禮拜

訪ねて、僕が僕以上に熱心な クリスチャンだと紹介した神 性欲者が意外にも僕と一緒に 堪らなくなつて途中で下車し 尻色平君だつたといふのであ たが、忘れもしないその變態 お尻を××されたので遂ひに こく思戯をされ、その揚句、 を訪れて始めて知つたことは た日のこと、電車の中でしつ 女中さんが用事の爲に外出し の數日後、僕が一人でその家

そして彼が田舍の教會を飛び その女の子に人前を憚らず戀 戀をし、その親に近付き、鮗 日曜學校の五年生の女生徒に 來たのである。其の後、彼が 出し、牧者の使命を抛擲した 面彼の變態性慾は寧ろ反動的 で、飜然身の過ちを悔い、天 く家庭訪問をするうち、大賃 原因がどうやらこゝで判つて たのは其時が始めてであつた 曳かれていつたのである。 つひに痴漢として其筋の人に なつて常軌をはるかに越し、 に募つてゆき、物懐い行動と 洗禮を受けたころは、その裏 モーゼの十誠を契ひ、三度び 主教に入つて、一切を戦悔し 教會から追はれた。彼は其處 員間の問題となり、到頭僕の な身振りをした事から教會役 面目にプロポーズしたこと、 僕が彼の性格の裏側を知つ

格を殺すために信仰生活に人 嗤ひ、且つ詰るかも知れ 尙哀憐の目で 擬視まもるばか り、僕はひたすらに彼を今も そは實に痛ましく惨めであ 理性と感情の分裂震と肉の乖 くハイドの血を湧きたゝす。 するほど、潜在意識はより濃 ギル的であららと然すれば然 た彼であつたが、フロイドで トリック派へと、漸次入信し から禁慾の徹底を要求するカ の中間をゆく長老派へ、それ メソデスト派より新・舊兩教 つたのだ。比較的自由な新教、 と。然し彼は彼のハイド的性 「クリスチャンも當にならん もさら言つて彼を痛罵した。 チャンよと。僕の親しい女性 い。似て而して非なるクリス 離、彼神尻色平の性格破綻に はないが、性慾を抑壓し、ジ

の理由を説明し得るであら 受けとつた。僕の全く驚いた あれば、僕は充分、讀者にそ この縁組はしかし不思議でな 新聞の記者であるに於てをや 牧師の娘であつたことである ことには、彼の花嫁は、何と 面から結婚式披露の招待狀を に七年、今春意外にも東京方 小説を僕に書き卸す機會でも しかも現在の彼の職業はエロ い。後日彼を主題にした心理 神尻色平が大阪を去つて旣

11 柳 十一月號 次

表紙……柴 谷 宰 = 郎

北支蒙疆の 印象 麻生 路郎…(二)

複詩眼人 留守番......小 ジギルとハイド… 高 鶖 寺 Œ. 鳩 鈍…(二) 前…(二)

街に住めば..... 高橋かほる…(ハ)

武玉川三篇研究(三) 森 梅本秋の屋 蛭子省二 東魚…(八)

秋窓漫筆… そくり帳 姬 田 1 鐘…(中)

おやぢとこども… 森 東 魚…(10)

りである。

]1] 近作柳樽… 柳 塔…… ·麻生路郎選…(III) 家…(ご)

集路 屋 ラヂオ體操 上 ….酒井大樓選…(二) 橋本綠雨選…(二)

各地柳壇…(12)

後 記(表三)・ 社關係の人々(表三)

川・協の頁 柳界展 望… 000

谷で陽の気

おとけちょしむ 家内写える

からいの女中さんか

ウギの使え ちらかかっ るさあっ いれていうか 京内の面守中に

けるかとう

はって オウナ

> 鴻 寺 小

からと

人或ひは我が友神尻色平を

留

守

番

にも感心したが然し多少とも 質のところ我身に撮んで不覺 これは穿つてゐると思つた。

人の子プラス一廣義に解釋し

支



(3)天津英和界の外人墓地(北部事際)に於ける路郎王幹 (4)天津佛和界の公蘭 駄然人氏 路郎王幹 静江女史)

に擴大せざるを得なくなつた。

柳は他の文學に比して、尤も

犠牲が支那及び支那人に對する 認識不足から充分に酬ひられた

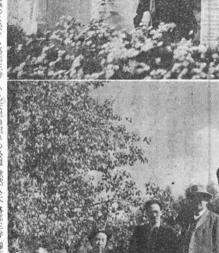
人である。今次事變による一大



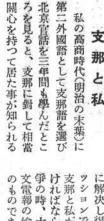
ethan.

自但





(5)天津 北寧公園の廻廊



爭の時、大阪遞信局の囑託で歐 のものであらう。しかし今次の 文電報の檢閱をやつてゐた時位 ければならなかつたのは世界戦 支那と私が多少共闘心を持たな ッションであつたからである。 に解決し得られない大きなクエ

> ない。私の脳裡には日露戦争當 家はいわゆる象牙の塔の人では 社會に即した短詩である。川柳

事變に對し る者にとつ ては文學す

變のために、川柳を失つて川柳

始すべきを思はされた。即ち事

クの作品を通して支那及び支那

がねばならぬ。私はパールバッ は支那及び支那人への認識を急

人の片鱗を知つた。更に自ら渡

の勞苦を憶ふと共に銃後の我々 と云はねばならぬ。遙かに皇軍 いとすれば戦慄すべき寒心事だ

起して、時流に投じたが、それ 時、國木田獨步が近事畵報社を

よりもより强く國策に沿ふて終

疆

幹主郎路生麻と氏路柳崎岩

られなかつ 關心ではゐ ても全く無

事變と川柳と私 た。

併し學窓を出た私には支那語の

しかしながら四国の事情は全支 りと信じ、靜かに見送つてゐた た。私はその不擴大主義を是な こまでも不擴大主義を持して居 今次の事變に對して我國はど

問題をオミットさせてしまつた

の愛着が支那に關するあらゆる 必要は皆無であつたし、文學へ

恐らく私の生涯を費しても容易 といふのは支那研究それ自體が

> かつたのである。 へた。イヤ私は考へざるを得な を生かすのも意義ある事だと考

日本人と支那と支那人

及び支那人に對しての認識不足 を繰返へして来た。私も其の一 位に立ちながらも日本人は支那 交へた。そして常に戦勝國の地 我國は度々隣國支那と干戈を

支して其の認識を深めたいと思

眞

崎

柳

路郎

夫妻から屢々渡支の慫慂を受け 友に委ね、北支蒙疆の旅途にの 「川柳雜誌」の編輯を社員並に柳 てゐたので、敢然意を决し月刊 私は張家口に在る岩崎柳路氏

神戸から大連まで

私は九月十八日の正午、知人

ける人も居ない。一本のテープ の無帽、ステッキー本の輕裝で もお互の空間をさへぎらない。 同じ慘めさだよ」とつけ加えた で敵に飛車や角を奪られるのと 手に振廻したが最後、ヘボ將棋 を握つた經驗がない。從つて下 云つて笑つた。「僕はピストル なら僕は兵隊さんでないから方 や七人は自信がある。それ以上 て「まさかの時には之れで五人 私は一寸ステッキを振つて見せ ある。ピストルはと聞かれたが を西した。冬服着用、相變らず 柳友の多數に見送られ、神戸港 たのである。紙の節約が離愁を いづれも國策に沿らて禁止され 向轉換して快速度で走るさ」と 入深めたかも知れない。小林 船が動き出してもカメラを向

書いた。

つた。もう誰が誰だか解らない さく私の近眼鏡の中に消えて行 の句を思ひ出した。皆の顔が小 本の外はどうでも良テープ

> トを點じて、再校をすませて來 眠りに入つた。私は枕元のライ もう夜の十二時近くになつてゐ だし、瞬く間に明石海峽を走つ 波は穏やかだし黒龍丸は一等船 振るのをやめて船室に這入つた た「新川柳評釋」の序文や凡例を た同室のパセンジヤーは何れも て來た私はやれく、と思ふと、 てゐる。急がしい仕事から遁れ 大澤氏から頂いた日の丸の旗を

帆するのでお目にかられぬので 市多樓、岩崎勇の兩君が海を渡 印刷屋へ送つた。小雨がパラつ 絡の櫻川不水君は今朝十時に出 ジャーが遠慮してくれたので三 十時半頃川・雜下關支部の多田 いて來た。急いで船へもどる。 だ。昨夜書いた序文を航空便で る。上陸して街の郵便局へ急い 人で愉快に語り合つた。關釜連 つて來訪された。同室のパセン へ入港した。憂鬱な空模様であ 翌十九日未明に黒龍丸は門司

2

(6)北京 居留民の避難した変民若

めるやうな美しい島だ。 りして六連島を横切る。目のさ ゐた。

門司を出てから一時間餘 までも何時までも帽子を振つて 鳴る。兩君は岸壁に立つて何時 が云ふ。軈て正午出帆の銅鑼が 残念がつてゐましたと市多樓君

らもう日本の海ではない。 と云ふ句が浮ぶ。こへを離れた こゝは何處まだ日本といふ

があった。 森牛壘、櫻川不水兩君から無線 変渉を依頼した。

午後一時十分 午前中、浦橋事務長に北京丸の 翌廿日。雨と風とに夜が明けた。

須啞三味の諸氏の出迎へを受け 詩朗、奧村雨人、名藤柳葉、高 南九の諸氏、滿洲番傘の出口夢 社の森崎佛心、渡邊雨明、田村 魚、小林茗八の諸氏、春聯川柳 訪。埠頭に佐々木三福氏を始め 船室に滿洲日日の記者二名來 あつて一時間上陸が遅延した。 翌廿一日。霽。八時半大連に善 大陸川柳社の高橋月南、野田錦 た。何事か取調べられる人が

故宮殿大理石の階段

(8)北京 景山

購めた。オール大連の川柳家と 日の寫眞班が來たので一寸失敬 の斡旋で寄せ書。そこへ滿洲日 つたが、歸途を約して北京丸の は落付いて話す時間を持たなか 北京丸が出るので急いで切符を 乘客となった。 してカメラに入る。十一時には 都菊でピールの乾杯。啞三味氏

大連から天津まで

勝舘を偲んだ。船室に戻つた私 は故高木角戀坊の知人である。 塚本某と同室であつた。塚本氏 私は十七號室に入つた。東京の か無い。一等は外人客が多い。 な船だ。この船は一等と三等し Kの黒龍丸に比べて遙かに小さ くに從つて日の丸を大きく振つ 旗がある。お互の距離が離れゆ の國旗を投げた。私の手にも國 を離れた。甲板に立つてゐた私 た。先年柳路氏夫妻と泊つた手 やがて船は老虎灘の海岸を過ぎ た。大連汽船の北京丸は〇・S は急いで啞三味氏の手へ日の丸 れて午前十一時、北京丸は岸壁 オール大連の川柳家に見送ら

間だから食事を取つてゐると云 るやらに命じてゐた。私は食堂 結局簡單な洋食を船室へ持參す 日本人のテーブルでは食事の時 快そらに食事を享樂してゐる。 ある。口が充分に開かないので した。外人を見ると如何にも愉 が」と云つて要求に應じない。 もう少し早やく云つて頂けばボ ません。それに不味いですよ。 したが「日本食は三等しか有り た。塚本氏は洋食を好まれぬら 失つて行く。夕食の時間が來 あつさり食事を切上げ部屋にも 占領され、三分の一が日本人で 出た。食堂の三分の二は外人で れたので兎に角塚本氏と食堂へ だが空氣の乾燥からかも知れな は唇がはれ上つた。原因は不明 ふ態度にしか見えない塚本氏が に開かないので不愉快な食事を へ出かけた。相變らず口が充分 しい。ボーイに日本食の交渉を どつた。海の色は徐々に青さを い。ボーイが食事を知らしてく ーイの食べる分でも廻せました 雑然としてゐるだけではない。 げ、三等船室へ降りて見た。室が 眺めてゐたがすぐそこを引上 げてふる。私もしばらく雑誌を は默々として雑誌のページを繰 快そらに談笑してゐた。日本人 室へ行く。娛樂室でも外人は愉 種類も一つの勢力である。娛樂 らしてやりたいと思ふ。食事の すべてに不潔でゴミーへしてゐ つてゐる。新聞をパラくと牆 ふか外人横暴といふかの味を知 を提供して從來の外人崇拜と云 ある。出來れば外人にも日本食 日本人には日本食を提すべしで つて一人さびしく船室でハムや れないと思つた。黒龍丸で同会 た氣分に壓迫を感じるのかも知 た。これはいけないと思った。 パンを食べてゐたのを思出し した曲と云ふ支那人が和食を婚

兩岸は揚柳や野菜畠や農家の點 を遡つてゐた。河幅は淀川位な もので、水深はかなり浅いらし い。水の色は土氣色の濁水だ。 廿二日の未明に北京丸は白河

食堂へ出て來ないのも、そうし

巡警が立つてゐる。一ト先づ部 る。眼下にはゴー・ストップの から見下すと万國橋の南詰であ テルの二階六號室に入つた。窓 私のトランクや風呂敷包みを調 の手荷物の取調べがはじまる。 出てゐると早やくも和田默然人 に万國橋畔のインペリヤル・ホ し、柳路氏の知人田中氏等と共 默然人氏等と簡單な挨拶を交は れた。取調べがすむと、柳路氏 やかな調査湾のサインをして里 クや風呂敷包みにチョークで鮮 べてくれた係員は支那の職業婦 た。下船したとこで、天津税関 氏、岩崎柳路氏の姿が眼に映つ 九時船は天津に着いた。甲板に 敷地の確立を計つてゐる。午前 く。しきりに護岸工事をして、 つて日本人經營の工場が限につ る。天津の波止場に近づくに從 河は九十九折してゐるそうであ 綴で景色はそんなに思くはない 人で、洋裝をしてゐた。トラン

が、姪の和田靜江女史を同伴し た。默然人氏も一旦闘宅された 屋に落付くと田中氏は辭去され 然人氏の説明では喧嘩が始つた その意味が解らなかつたが、默 たら外人がそれを預ると云ふ。 がステッキを持つて入場しかけ 經營で公然の賭博塲である。私 でハイアライ(HAIALAI) ルに歸つた。夜の八時過ぎ四人 の健啖は羨しい限りである。食 る。明るくて勇敢なお鑢さんだ Yへ出かけてロシャ料理の饗應 やイタリー租界を見物してホテ た。こゝから渡船で特別第三區 内地でも知られてゐる店である 司は支那人經營の百貨店で、日 商場や中原公司を觀た。中原公 の見物をした。日本租界では勸 事がすんでから佛租界、英租界 めてゐる時間が長かつた。默然 折角の御馳走も唇がたくつて眺 から來津された女醫だそうであ を受けた。靜江女史は最近橫濱 S · CONFECTION AR へ行つた。こゝはイタリー人の い。ゼンマイ仕掛の爆彈事件で 本商品を相當に扱つてゐるらし た。同氏の年配であの體軀、あ て來訪、四人でKARATZA 人氏の健啖振りには一驚を喫し 其處から洋車で白河の岸に出

(12)同ホテル前の洋車駐車場



(1)グランドホテル ドウ パペキン









日本

(15)北京西郊 萬壽山の廻廊

(16)北京西郊 萬壽川昆明湖

(17)同 萬添山の石舫

時それを利用されるのを恐れる いてゐる。その費用だけでも大 の出入を警察で禁じたので非常 からだそうである。最近日本人 残し三人で夜の日本 租界を觀 したものだ。そこへ静江女史を 上のタワーはネオンサインで知 内は晝を欺く明るさであり、屋 方。經營者は赤字であらう。塩 少數なので從つて配當が少な 張合がないらしい。賭ける人が ンと席が空いてゐるので選手も ボーイの敷の方が多い位だ。ウ にさびれてゐる。入場者よりも い。之ではますくっさびれる一 車を敷設したのであると聞い

城壁に取圍れてゐるが、天津に 街はどこでも外敵を防ぐための 廿三日。午前五時に眼が醒めた。 を取りのぞいてその跡へ市街電 にも城壁があつたが、その城壁 はその城壁がない。曾ては天津 ジュームの經營である。支那の 電車が動き始めた。電車はベル 寂として摩がない。六時頃から ホテルの窓から万國橋を觀る。

枕邊に飾つて立派な棺桶に安心 から棺桶を買ひにゆくのでなく ら七八百圓迄のものを作つてゐ 貧乏人でも棺桶代だけは残して 街五十九に訪ねる。途中で棺桶 時過ぎ默然人氏來訪。天津東站 出て來た。多數は工場へ急ぐら た。勞働者の群が流れるやらに させるといふのが支那の風習で とみると子が親のために棺桶を ゐるのもあれば今度は助からぬ る。日本のやらに死人が有つて ゐるそうだ。最底四十五圓位か しい。九時に食堂へ。食事がす て早くから買ふて部屋に飾つて 作られてゐる。支那人はどんな 屋を見學した。堂々たる棺桶が 路大隅氏紹介の金藤氏を富貴大 分の一は〇〇〇〇の〇〇になつ が魚釣りをしてゐる。公園の三 行つた。入場料三錢。鐵路巡墜 營のバス)で寧園(北寧公園)へ (驛)の前から公共汽車 (滿鐵經 んでから別室で手紙を書く。十 てゐる。公園もさびれてゐる。歸

る。就緩一時。

ックの「大地」を讀まれた方は頷 ある。この間の消息はパールバ 感が働いたりするのではあるま されたりしてゐる中に多少第六 くて不明白であつたのが足蹴に 議だと言ふ話だ。これは必ずし ければ金儲にならないと考へて 車は明白? と云へば必ず明白 在であつた。柳路氏の話では洋 にして探し當てたが金藤氏は不 のである。あまりの馬鹿々々し 實彼等の三人が三人共不明白な らず走りつどけてゐるが、その 聞けば、明白々々」と云つて相綴 を知らないで無暗に埃つぼい街 づけるあらら。洋車は富貴大街 いか。要するに支那人同志すら も不明白が明白になるのではな と不明白が明白になるのも不思 ゐるのださらだ併し足蹴にする と答へて客は乗せる。さらしな に聞いても判らない。やうやく にしたが少しも動じない。巡察 さに柳路氏が彼等の一人を足蹴 不安になつて「明白?」と云つて を走るばかりである。いさ」か 店はすべて夜間の臨時休業をし 十時十五分から始る英租界のイ 拙からくる誤解を徐去する事は 明白が不明白となる場合が多い 本人の四聲を無視した支那語で 話の通じないのもゐるのに、日 て敬意を表した。一時過ぎ宿に 非常に緊張してゐた。日本料理 民大會があつたので英佛租界は 同劇場を出た。その夜日本居留 物に出かけた。十二時十五分に ンペリアルシエターへ映畵の見 物を視察して宿に歸つた。夜は 界へ引返して各種の公共的建築 事變當時の話を聞いた。日本和 日中學校の前を少し郊外に出て の一つである。それから私立中 を話し得るやらに努めるのもそ であり、日本人が完全に支那語 日本語を話させるのもその一つ 題であると思ふ。彼等に完全に 今後の日本人にとつて大きな問 れてゐるらしい。この語學の不 常に短氣な人間だと彼等に思は 直ぐに足を出すので日本人は非 のであらう。その場合日本人が 八里臺を望み默然人氏から色々

> で萬國橋事件について語り合つ 歸へつた。柳路氏と三時過ぎま

の方はスパイ關係やテロ浸入を 出る前に支那人は支那人日本人 北寧公園を過ぎてから車窓をみ を調べた。一行は二等に乘込ん 訪。天津東站へホテルの自動車 北京に發つ日だ。默然人氏來 は日本人で列をなした。支那人 いた。月豪(プラットホーム)を 跡を見た。午後一時半北京に着 來たさらである。所々に塹壕の こゝは激戦地で幾度か逆襲して つかの驛を過ぎて坊郎に來た。 窓外は楊々々、水々々である。幾 てゐる暢氣な風景を見せられた 浸しであるが、そこで魚を釣つ の畠地は湖水のやらに一面の水 があつて頗る便利である。窓外 だ。列車は廣軌で窓の側に小卓 京行に同伴する事になつた。驟 氏、靜江女史、知人の吳服屋を北 で出發した。默然人氏が令息祭 てゐるとなべ鶴、鷺等が居る。 ではコレラの豫防注射の證明書 廿四日、七時に離床。今日は

莫の感を深かくした。次いで紫

に歸る。日暮れから柳路氏と二 の禁園であつた。六時頃ホテル 此處は北京市中最高の地で歴代 禁城の北にある景山に登つた。

人で師府園の玉川いけすで晩餐

物にするところが支那式だと云 美の偉大性に至つては筆紙の及 る事になつてゐる。莊麗と建築 へば云へぬ事もないが、秋風落 ぶところではない。皇居を見世 此處は三日に區切つて見物させ それから紫禁城の一部を見物、 たので、共に市中を見物した。 は宿が決まると直ちに來訪され る事にした。默然人氏一行四人 PEKIN(北京飯店)へ宿泊す GRAND HOTEL DE 人氏の一行と別れ柳路氏と二人



を見物した。公園内に瓊華島と は臨時政府の委員會のため入園 云ふ山がある。白塔があるので を禁止されてゐたので北海公園 れたところである。中南海公園 年正月上辛の日に後方の皇乾殿 層に築かれてゐる。新年殿は毎 時にも祭典が行はれた。大圓樓 辰・夜明・雲雨・風雷・の神及 白塔山とも云ふ。この白塔は清 て天下の五穀の豊穣を祈願せら に安置してある神位を率遷し の新年殿で壇を祈穀壇と云ひ三 に耐つた所で天變地災のあつた し、天子自ら壇に三跪九拜し天 び歴朝歴代の皇帝の神位を移安 穹にある 皇夫上帝・大明・星 丘は毎年冬至の日の出前に皇字 所である。天壇の主體である圓 建てられその重なる建物は齋宮 は宮城に次いでの規模の大なる 氏、靜江女史の三人來訪。一行五 と云ひ天子の齋戒沐浴せられた ものである。明の永樂十八年に 人で天壇へ車を飛ばした。天壇 廿五日午前九時。默念人氏、榮

> 榮氏、静江女史の三人來訪。柳 までじある。就寢二時四十分。 THEATRE)の映畵を見物し 光電影 (CHENK WANG 見物、今は中央公園と改稱され から天安門内にある中山公園を る。畵舫に乗り對岸の極樂世界 た。時間は十時から十二時十分 表し秘に成功を祈つた。夜は眞 さらである。氏の慧眼に敬意を 學校を開校して校長となられた 事など話合つた。氏は北京美術 服部亮英氏が大同の石佛を出品 家合同展覧會が開催されてゐた てゐる。園内に第一回中日美術 並びに闡福寺を拜測した。それ の順治八年に建てたものであ してゐた。同氏に逢つて서重の 廿六日、朝八時に默然人氏、

> > 中央には龍王廟、之をつなぐ橋

を西に出ると石舫がある。池の を見られたところである。長廊 乾隆帝以來夏は離宮として政務

昆明湖、園名を清潴と名づけ、 ふ寺を建て、山を萬壽山、湖を

それから且々たるドライブウェ 見物した。孔子廟は一に文廟と 路氏と五人で孔子廟、喇嘛廟を 央には孔子、その左右には四聖 碑が林立してゐる。大成殿の中 験に及第した名士の奉納した石 云つて元以來歷代歷朝進士の試 十二哲の神位が奉安してある。

> ゐる。玉泉山から更に香山に向 北京宮城内の北海の水となつて

た。こ」は避暑地として知ら

けその碑が建てゝある。この水

は萬壽山の昆明湖に注入し更に

裂帛湖には岩の間から清水が湧 登つて遠望を恣にした。山下の ある。一行はその最上層にまで

遺蹟で山頂には七層の玉峯塔が

帝の夏の離宮であつた静明園の 壽山の西に玉泉山がある。康熙 は玉帶橋(十七孔橋)である。萬

き乾隆帝は天下の第一泉と名づ

北京西郊

香山と路郎主幹

(20)北京西郊

蘆緑橋上の路郎主

眠りに就く。 見る。十二時半宿に歸り一時半 AVILION)に外國映畵を

壽節に山上一大皷音廷壽寺と云 隆十六年に 皇太后 六十歳の萬

を萬壽山に向つた。

然人氏と靜江女史が來訪され 十七日。五時起床。九時に默

有名な處である。この橋は金の 法射撃に端を發した日支事變で 日支那兵の我が皇軍に對する不 をした地で、昭和十二年七月七 橋は、北京の西南に有り昔餞別

511 府 線

行く事にした。途中、督務機関 たはれた廣安門を過ぎた。蘆溝 の櫻井中佐が飛下りて続名をら た。今日は四人連れで蘆溝橋へ

宿に歸つた。夜は平安電影院(P 雇つて山上に登つた。七時すぎ なつてゐる。知らぬが佛で籠を れてゐる。今は敗殘兵の巢窟と

(21)回 蘆澤橋上の駱蛇

さ九百尺巾廿四尺の大理石橋で 三十一年を費して竣工した。長 大定廿九年から明昌三十年まで

獅子の頭をもつて装飾としたも

見た。それから一文字山の戰跡 あた。

支那人にはからした特殊 ら死平に引返へして、支那家屋 ねばならぬ。(以下次號) の智慧も湧くのである事を知ら の中を默々として歩みつどけて の廻轉の動力ともなつて狭い庭 屋をのぞいてみたら豆を碎く臼 れて一行は再び自動車へもどつ 説明した。兵隊婆さんに見送ら ろしさを身震ひの動作によつて の記念碑からすぐ眼の下に見え た。その婆さんの家は一文字山 兵隊婆さんと語り記念撮影をし を尋ね日本兵のために給水した が砲彈のために打碎かれた跡を 月の碑が建つてゐる。蘆溝橋か るので外國人はマルコポーロ橋 水車に限つたわけでなく、豆腐 てゐた。この眼かくしの驢馬は 驢馬の行進は水車の動力をなし た。歸途畠の中に默々として步 と云つてゐる。橋畔には蘆溝曉 地を通りその旅行記に書いてあ のである。マルコポーロがこの を運んでゐる目かくしをされた てゐる。婆さんがその當時の恐

(22)北京西郊 一文字山 默然人氏 柳路氏 路郎主幹 一文字山 (23)同 路郎主幹と兵隊婆さん

(24)北京西郊 水車を動かす眼隔 つつき

郎 選

雲 嘘 女 眉 心 3 棒 ば 嘘 壁 嘘 ま T か 0) 今 10 10 0 木 魚 見 1= 3 猫 0 ち T to 0 音 3 否 3 あ t れ 1= 3 る 0) T ま 5 眉 大 大 荷 te 阪 阪 że U か 皆 運 × 2 橋 ~ 持 Ł 生 T 根 葭 6 性 75 1

阪

城

陽

は

東

よ

<

國町 モ Ш 慰 張 策 门 岳 間 0 ~ 8 袋 0 1 北 非 か 支 0) れ T 0 麥 ŧ Ш 團 18 體 12 目 T 當 な to 3 6 3 0) C IJ 悅 ば 嵩 行 -1 < 也 ッ 入 そ 氣 也 な ク 3 な サ 6 " 7

> 湿 文

だ内 邪 算 氣 居 味 な 0) 煙 あ た 女 草 4 4 4 福 U 分 51 か 3 灰 0) 聲 出 狀 te 前 3 袋 か 持 U L

大

橋

か

ほ

3

自 IE. 斑

Ł

ま元

風暗

77 京 舘 1 南 非 飛 T 京 3 ば 3 -支 す 那 ま 君 芝 で E 餘 僕 波 かい

駈 何

落 は

3

岩

路

名

0) 5

袖 0 T

で北 茶

漫 ラ 盐 1 0 な 顮 常 張家口 時 で 醉 0) 岩 7 崎 松 見 え tt

部

長 ア

1

戰

線

作

柄

送

3

親

L

醉 37. Ξ 藝 事 5 者 戀 6 な 3: 5 れ 北 他 1= 支 所 樣 C に に 聞 駱 7 < 駝 IJ 音 0 ヤ 締 0 足 0 色 あ あ 3 せ T

見 が 10 3 る h 燃 な る 渦 卷 た 濱 か 6 E 水 地 立 谷 ち 獄 鮎

阪

美

漫

筀

秋長 屋靈昨妹 母 瞳 根 现 H が 0) 0) 0) b 賢 手 橋 0) 今 < 不 低 見 台 滅 H 术 0) 18 te 6 2 3 信 3 U 夜 0 3 h 洋 ほ 居 0) 0 馬 0) 酒 は 候 秋 鹿 朝 te te 5 見 賣 te あ 流 れ L れ 3 3 灯 3

爆 武 柿 化 ン 機 3 10 漢 te cp 1 75 陷 3 五落 1 4-待 0 下 名 0 T ま が 3 0 5 5 L 大 延 圳 Z. 大 阪 よ び 2 1: から 3 E 3 須 41 0) # そ 3. 田 び < 6 か T 豆 な F L 3 秋 0 3 0

モ、重祝

轉 直 3 יי が 車 0 過 5 5 坦 3 4 1 t T 制 貧 腿 す 令 篇 3 1 7 3 あ 大 書 \$ 3 U E 1 手で な 6 答

君 ク t H 1 本 0) 人 赤 0) 4 色

大

四

40

わ

te

張

切

0

1:

t

17 蝶

0) 舞 鏠 灯 子 家 明 賃 直 石 から 通 夜 取 18 汽 待 れ 車 大 3 ち C 程 ŧ せ 度 72 5 加 \$ t 藤 な な 0 5 L 1

割 須

51 施

"

話 味 0 T 虫口 線 3 かい 0) 出 な 稽 3 T 古 云 3 電 は る 話 れ U) から 7te ょ 大 さこで 阪 3 見 付 か Œ 寝て U > 0 L 水 ま ひ 容

> る、詩は心を慰むれば足れりと 何と考へ違ひしたか、餘り時局 せた様に時局吟を採録するのを事變發端以來の柳誌が云ひ合 迷論を吐く人が有る。 詠ずるを以て最上とす、 に拘泥しすぎては詩の本質に悖 するもので有るから花鳥風月を なんて

取られたと云ふ笑へない實話が漸く数つて根本を挿したら水が も捕すような氣持で蔓の末を瓶 根本から切つたのはよいが花で ある、即ち枝葉のみに氣を取ら にさしてヘチマ水の垂下を待つ れて本を忘れたのである。 て居たが一向水が溜まらない、 糸瓜の水を取らんとして蔓を

民も、暴支膺懲の爲めに滅私率線に銃執る勇士も銃後を護る國 為に聖職は續けられて居る、東洋平和の局に遭遇して居る、東洋平和の 局に遭遇して居る、東洋平和の

書け一斉に 区便美

取つたヘチマの墓から水を取ら知らないもので有る、即ち切り知らないもので有る、即ち切りのはないのでする。 の愚論である。 居る今日花鳥風月云々なんて云 公をモットーとして奮ひ起つて んとする様な本を忘れた謬見者

を期し、時局中心の作句態度を 本に國民精神作興に寄與せん事 採るように成つたので有るが、 これをしも不可なりと断ずる輩 茲に吾々川柳人は愛國熱意の 酒 樓

る評を下すであらう。

る詩こそ人を感動せしめ得る、 の勇士を偲ばずには居られない たりとしても其場合必ずや戰線 を譲つて花を愛し、月を賞で得居らる」だろうか、假りに一步 月がどうのこうのとやに下つて 居らる」時、 惜しんで銃後の固めに努力して 人々は花を愛し月を賞づる暇を あるが、總國力戰の今日銃後の 來ない、これを救ひ上げるのが 彼とか因緣つけて生埋めにして は有るまいか、 が崩れて居ようと差支ないので 例へ季題に外れて居よらと詞型 だらら、 しまう様では真實の詩は生れて 花鳥風月を愛する可なりでは 柳である、吁ありがたい哉 此の時此の際生れ出づ 詩人のみが花鳥風 これを何んとか

間本來の思想發表を制限しよう 季がどうの約束がどうのと人

、柳大菩薩と禮讃したい

好南支

事支那

多陸

邪

厅

人

0)

邪

魔

te

矜

す

過

上便

0

づヱ戦 天君女 桐立三 着步 泣 意 銷 3 カ 燈 か T ス き見 夏 心 0 時 地 の店 一話废 飾行 > F す法拔 虫 か L 人 服 員 薬 犬目 つ補 cz 3 にの 女 < に \$ 0 0) て助 2 3 ハ器 0) 特 3 歌 君 爪病 C 母: 3 \$ 12 to 戶 B な i 先 氣 効 か 稻 舞 迷 0) L あ か 0) 智 は 0) 0 ス 戁 3 U 伎 5 後 長 2 12 T 冷 な家 1. -5 重 日 12 あ T 忠 花 4. 和 15 な のには 18 3 85 大阪府高師资 臣 女父お本ほ 3 3 3 鈥 信 3 水 6 Te ッ 4 + 藏 2 の洗刀 6 Ш 3 大 を 10 花 大 3 見 カ 22 ク 阪 阪 運 强 類灌は 0) 書 娘 1 te よ 言 な T 3 to 寺の 岩 がが出大 5 葉 0 < 座癖長 丸 貰 黑 叉 擔 あ te J: L ひ 0 な te 111 坂 尾 けか Æ 持 3 1= 潮 形 1. 3 \$

ち

水

花

O)

ま

ラ

te 0

L 閑

3 3 麗 秋

3 菊

プ

p 唉

ガ

ラ

守

宅

は

ひ

0

が濱

か

H

久

米

雄

香

快パ巧御

見

0

ベ拜

謝 體

T

け

3 普

2 辭意

フ 並

V

配

及

1=

氣

取

0) ッ T 聽

IJ

ズ

よ T

晴

3 L

虎

去 5 し聴 あ うば 3 を 弟 感 U 文 か L 弔 今 to 3 て字 な L 疑 見のり 弟 H ひ 等 先 22 \$ は 0) K) Ł 松 並 3 母 11. 船 大は 111 ~ 3 5 Vi 3 0) 目 酒 3 な 浮 旅 佐 35 te L 12 膛 顏 木 3 Ξ 樓 福

坊

弟ひ母船島

は t

> 6 物

k

弟

のもの脚

面ミ為

影けよ

5 L コ貨出眞百久翌 迷線金殘沈此 7

湖 書 夢出移 秋 懸六僕そ 犬 香 槌 0) 賞時 1: 不情疊 し朝 3 獣の 1. に征轉 は 0 野友 で ŧ U か精を敷振は はがれの次 D 澄 風 母 0 L \sim 探 5 0) に綴 2 り煮 難 T 有家 T 煙 形は ス 80 呂 0 君退す戰夜 ŧ なつの E 6 18 3 儀 風 勢僕 0) 0 今 0 ~ ボ つて末ちれ な 给 歡 愛出 待院活况がデ 我 な 不の It ス H つ近字 T お席 音 秋 送 甲 征 = 0 6 3 家 0 利番 13 - 7E 10 0 31 1= 丸胃父の 6 虹兒 5 T to 0 E 15 0 種 變 2 U 散上猪飲砂 近 から あ 决 拜 M. 迚 覺 1= 窓 幟 0 5 12 T **愛媛縣大洲** U \$ T to え 下 to 行 躰 松 じに \$ 唤 は ス < 0 0 5 П te 80 Z 路 開 來 3 聞 原 te 3 nt: 1= れ 聞 た 足 < 3 to T > 3 145 3 < り 番 今 勝 な 稿 3 < < 潮 5 る U 0 渡誇 1 0 紙 3 3 1= 3 放 谷 嬉 6) 構 湯 H JII 征 0 直 山 明 椋 暁 途 る JII

影

秀

叫ばれ出した、果して柳俳一致 等の人の作句態度が川柳に近 く枝葉末節のみに捕ばれすぎた が若し有りとすれば、そは恐ら が脚下から崩壊するの日ありや するや又絢爛たる現俳壇の殿堂 しつゝあるが故に柳俳一致論が が現れつゝあるではないか、之 なんて云ふ俳壇から續々異端者 吾人には豫断を許さない

2 3

9

帳

童

2.

探し求めて調べることを云ふ。 敬稱なのである。コイサンは主 續三十年とか四十年にも喃々と ラク』『コナカラ』等々がある。 島の内などは獨得の言葉がある た頃、二た月も三月も「路傍の 人の娘の妹を店員等が呼ぶ名で ベーヤンとは大店の白鼠即ち謹 辯を勉強したものだ。船場とか 石」の吾一の様に藏の中で大阪 する大番頭を主人の家族が呼ぶ 『ベーヤン』『コイサン』『セー 僕が大阪船場の大店へ這入つ

兒

がある、まだ入店後間もない頃コナカラに就いて僕に面白い話 押した。と、八百屋はふき出し 言ふので「豆だけやがな」と念を 豌豆をコナカラ買ひにやらされ くれないので催促をすると「コ た。「コナカラいふたら、 ナカラ渡しておますがな」と、 た、豌豆は貰つたがコナカラを

定下さ 非 S U N 店が有ますから御買求の節 モノをサン硝子として販 頃ワレ 金文字入真正 タ場合に役だた H ご御 賣 n は是 する

急

大阪日本橋五 有全國時計 店 1 百貨店 西 光 澤 堂 本

で有らう。 頑迷者等の罪であると云ふべき

爲の聖戦の意義を沒却しない様 與しようではないか平和招來の き關心を以て國民精神作興に寄 を云つて居らず、再度時局に深 する者花鳥諷詠なんて吞氣な事 お互ペンを持つて奉公せんと

鐘

姬

田

9

店



1=ヒチリキの音とソプラノとは合ふ 0 12

れぬが、何處かに共通點が有るの歟。 秋の屋―吾才の考へでは合致しさらに思は やらに思ふっ

云ふのであらら。ピイノへした壁の女はよく 東 角=細く高い調子が篳篥に丁度合ふと

先徒士の通りに曲る潦

住したからだ。先驅の通りに潑をよけて曲つ 御徒士町の名が残つて居るが、昔はそこに居 登をなすを徒士組と稱した。今日でも下谷に ていつたのであらう。 二―將軍出行に際し警固の任につき先

あつて、潦のあるはずがない。此れは机上で 將軍が御成の時は、その前に道路を修膳して 曲ることなどは無いと思ふが如何であらう。 行なし、たとひ激があつても、それを除けて 作つた句である。 秋の展 = 將軍の出行には、道路の中央を通

山で、遠足の子供等の場合にも引當て、興趣 のが同じやらに水溜をよけて通ると云ふ處が くる情景もありさらに思はれる。要は列のも 魚=一と夕立の後の場合などには、か

実験して居ても床しき葭籐

しき感は出ぬ。尤もお茶屋などで用ひてはる **居るのであるが、餘程特上製物でないと、床** --- 腹すだれを下ろして、晝寢をして

社會の邸宅では使用されない物である。 秋の屋=- 葭簾は簾の中でも下等品で、上流

のを、濫に切伐して金に換へ、而して浪費す が子孫の爲を思うて、土地に植林して置いた る事をいふ歟。萬一さうであつたらば、祖先 秋の屋=「あほふ遣ひ」とは、金銭を浪費す東 魚=平凡な句と思ふ。

るといふのであらう。 山林にまで手をつけて、道樂 森に强い意味が含まる。 をするものと思はれる。 省二二然らむ。「代々」の 東魚=馬鹿息子が、遂に

凹十七

線香の煙であるらしい。 義士の墓であらう。「陽炎」は 秋の屋―芝の泉岳寺の赤穂 東魚=線香の煙も、注い

住に街

だ水の乾きかける心持ちもあ

ばめ

屋

取りに、内々他へ賣つたのを、見あらはされ たとでも云ふのかと思ふが。 には何とも解しかねる。 魚=解し難い。下男などが、薪を小遣 ニ」「前らしろ」に相違はない。

二一難句だ。

利の轉がつてゐるのをみる事がある。如何に も淋しい情景だと思ふ。 秋の屋=-竇家や空家の庭などには、 魚=徳利で殊に面白い。 賣喰の裏に淋しき捨 徳 利 登之德

黒さんと云ひます、布袋様は布袋ハンと云ひます 我ハン大黒ハンとは云ひません(決して)我さん大 門ハンとは云ひません、毘沙門さんと云ひます、 きますが…大阪はお姫ハンとは云ひますが、天神 り聞いたりする度に氣になるので一寸云はせて戴 が、辨天さんは清元の梅之春の文句の通り辨天さ ハンとは云ひません、天神さんと云ひます、毘沙 大阪言葉を間違ふた儘で活字にされたのを見た

> る。これも好き句の一つ。 私の浪病人生活を穿つてゐるやらに感ぜられ 二=未だ賣喰ひはしてゐないけれど、

者紀逸の最も好むところである。句意は解説、我の屋=去の字を二つ味み入れたのは、監 する要がない。

ぶれたのかも知れない。 ねる事は私も好む處で、知らずく 省 ニーかる技巧も教へられて置くべき 魚―さもありさらな事である。字を重 、紀逸にか

秋の屋=如何なる故事か判明しない。 慈悲有る母をうらむうは玉 (前句によつて判明する事であらうが) 魚=「うば玉」は恐らく戀の閣路であら

丸山て琴三味せんに合め唄 二=戀關係ならむ。

り」(古句)チャルメロ入などであららとの句 には合はぬ。「丸山の藁者ラッパもすこかじ にした場所だから、琴三珠線では、彼等の唄 省(388)省 1 = 長崎の丸山は、碧眼紅毛人を相手

秋の屋=句意明瞭。

は出來ない。丸山連の方だな。 魚―吾等も、どうも琴三味線に合ふ唄

大きく遣入霊の忍ひ路

八目につく。大きく這入る心境面白し。 秋の屋 | 現今ならば富豪が自動車で、妾宅 省 二=費日中まごくしてゐては、 却て

東魚=面白い句である。「大きく這人」は

通ひといふ情景であらら。

省 二=中七一寸氣づかず。九老僧とは日巧みた措字と思ふ。 らな事はなかりしにや) 日印、日澄、日行、朗慶。〈人形を賣つたよ 蓮の法孫、日像、日輪、日善、日傳、日範、

秋の屋=人形といふのは、日蓮の木像など

詳にしない。 流す事があるのではないのかと、想像するが 月の御難會かと思ふ。人形は其時、形代でも 魚=薄紅葉とあるから、十月でなく八

あぶない義理の出來る男色

あらう。大川友右衛門と印南敷馬のやらに。 る事である。 秋の屋―親の仇討の助太刀を頼まれる事も 省 二=命かけての義理張合など、無論あ

省(392)東 魚=一寸可笑味もある。 一人づい鏡借り合ふ松か岡

秋の屋―各自に鏡を所得せぬ故に、唯 1=松ヶ岡尼僧の日常生活の一端が判

山居るから、鏡は是非ゐる事であらう。 を互に借合ふので、如何にも尼寺らしい。 魚──
込んで髪を切らずに居るのが澤 一面

男を有名の相撲とみても宜い。 あちこちから盃が廻つてくる。 秋の屋=追廻さる」は如何にも面白い。大 ──體格がよいと大に飲むであらうと

面白いやうに思ふ。 分ある。これも見かけ丈けで、あまりイケな い方であらら。其方が「追廻さるゝ」が一層 魚―體の割に存外酒のいけない人が隨

-- 日蓮は弘安五年十月十三日寂。十 蓮の 世も 僅

去った、享年六十一)といふの歟。 短い時であるが、日蓮も亦其の如く早く世を 月は御命講。この事を云つたものか。 秋の屋=陰暦の十月は、一年中で最も日

それをかく一寸ひねつて云つたものと考へる 見れば、神無月だけに外に目立つた祭なども なく、吾もの顔に盛大にやれるお會式である ド十月だけだといふ意であらう。日蓮宗から 魚=一年中で十月こそは日蓮月だ。た

> (335)今朝の秋

しまほかとは云ひません、行きまよかしまよかと云ひます んと添伏の…辨天さんと云ひます、それから行きまほか、

行くンかするンかとは云ひません、行くんか、するんか

瘦せする、漸く初秋の凉氣に 命めでたき蘇生の思ひ。 秋の屋―暑さの峠を越えて --汗かきは段々に夏

らけとれる。新凉を感ぜしめ 魚―ほつとした様子が

漸く安堵する。

一夜鮓宮と桑名の人こゝろ

井正雪か事よりこのかた晝の七つ過ぬれば舟 は何時にても舟を出しけれ共、ちかき比、由 薬にくし佐屋へまいりてよし、又そのかみに り桑名まで七里舟渡しの頃に、このわたしは さしぬれば又心易し。されど風はげしければ 木曾川のすそ也。水出ぬれば上りがたく、汐 を出さずと。馬光の句に「旅枕からばや我も して一夜を經しもの―東海道名所記の、宮よ の腹に御飯をつめ苞入りにして火にあぶり懸 ||一宮桑名間の旅氣分--|夜鮓とは鮎

の隙がかくる故、乘客が早く對岸に着きたい と云ふ心持が、一夜鮓の早く馴れるのを俟つ 心持と同じである。 ふのが有り、兩驛の間が七里で、渡船も餘程 秋の屋=宮と桑名の間には、間遠の渡とい

魚―お説通りと思ふ。

省(397)東 1=朝歸の息子などの心持。 忍へは内も盗人の 分

氣がないが如何。 心持ちかと思ふ。外から歸つたやらな場合の 忍んでゆく、我家ながら盗人の如くに、との 人か、例へば心を寄せた小間使などの部屋へ 魚=「忍べは」といふのが、一家内の何

やはり貴解の方が適切のやうだ。夜這の事を 朝歸りの句が多いし、凡てを强く解してみた ○盗人などとも云ふから。 二=御尤。私も一應はさら考へたが、

せん。神輿をかつぐ掛聲は情調ある「よやさく く」と云ひます、なア親分そやおまへんか…… くなんて何の事やさつばりわからぬ事は云ひま

大宮人も蚤を取る

が、蚤をとるとて急に緊張するところが、如 大宮人の蚤取は應揚で風雅かもしれぬ呵々。 秋の屋=日頃は應揚な顔をして居る大宮人 支那人は南京虫より蚤の方に困る體質の由 1-漫畵材料。蚤取眼は滑稽味がある

ありさらな姿が想像される。 魚=奇拔な句である。 狂齋漫畵にでも

生へ左り前なる風 0

省ニールに「落生に左まへなる風の神」

取りさへて肌入るのを見て歸る

秋の屋=命懸けの喧嘩ではない。市井に展 脱いだ肌を入れる迄見て歸る。 二=喧嘩の仲裁に入つてどうやら納ま

の喧嘩の趣はあまり見られない。 秋の屋=淺草寺の歳の市で、此日は境内が(401) 市の有る日は遠い入相

ッなんか着てゐるから、どうも昔の片肌ぬぎ

日はざわついてゐて入相も遠く聞える。 三日とか五日とかに市の立つ所がある。 魚 = 年の市でなくてもよろしいと思ふ その

す。それから神輿をかつぐ掛醛もワッショイー は云ひません、無かつたら電話かけてやと云ひま でせら。無いかつたら電話かけてや、なんてやゝこしいこと と云ふのは平野、八尾、柏原、放てん邊り河内方面の言葉 ・るほか橋高

338 大宮人も蚤を取

何にも滑稽である。

と出づ。重複に付、解は略す。

々みるところである。 角=今は洋服が多いし、和服でもシャ

に聞えるといふの験。 雑沓する故、入相の鐘の音も遠方で撞くやら

> たので「鐘はかり淺草市や年の市」、吐月)。 く大きな市の方がよからう。淺草が引用され 二=句面には淺草とはないが、なるべ

豊のあかりに拜人か來る

のでは甚だ平凡である。 といふので、大甞會、新甞祭の翌日、豊樂殿 に於て行はれる饗宴であるが、拜人がくると いふのは解し難い。單に拜觀人が來るといふ 秋の屋―豊のあかりは、正しくは豊明節會

云ふだけだらうと思はれる。 魚―豊明節會に参列する群臣が來ると

などあつて敷を盡くす。平凡に相異ないが前 省 二=五節の舞姫の舞、上達部の催馬樂

平凡至極の句である。 秋の屋―單に群臣がくるのでは、いよく

水入レて鉄も朝顔も遣ひ

する物か、自ら使用する物か、どうも判然と 水入れてが不明で下五の遺ひ物も、他へ贈呈 秋の屋川平凡の句のやうであるが、上五の

三一二二二二五四〇八六 關野な胆春○ うまく かまく 野陽落海酢 5 又 外係胆 かす解正 く だ ら む



お や・ぢ・と・こ・ざ・

りしてゐる。誠に淺はかな事 らかなと安心しやうと思つた な事をのべつ聞かされて、さ

先方は、「へえ、六人のお子

だっ

は八人と答へたのだ。すると

何人だときかれたから、

私

よそ目には賓だそうで子

女中なんか居て異れる筈が

解釋したのだ。私は苦笑せざ 吾等夫婦の頭敷いれての事と た顔をした。八人は家族の敷 さんでは大變ですな」と驚い

来る 子澤山匪賊の如く菓子

佛壇の菓子 の豫約は母

位色々なもの りの交渉を開 佛様のお下が すかさず母と はやい奴は、 らう。時には 佛壇も少なか の供へられる 私の處の佛壇 壇と云へば、 まらない。佛 始するからた 中に勾配の

魚でも肉でも何で へられてゐる

と出來

た。ちつとも可笑しい事はな ッと取つて付けたやらに笑つ 仕方がないから私は、ハハハ

ないぢやあり

ら、先方は「え」ッ」といつ け八人なんですよ」と云つた るを得ない「イ、エ、子供だ

たきり、呆れ返つた顔をした

心がけだなアー

の事を、 が振はねェなア」と思つたり 私は時々、 覧に入れられる事などもある つたそばが蒸籠のまゝ一寸御 事もある、 する。私は兄と二人きりであ 比べて見て「どうも自分の方 も供へられる。母親が好きだ 自分の小供達に引き 自分達の小供の

は院入御

谷

內

小

兒

科

病

院

め需

器學博士

Ш

中

亀 郎

醫學博士

谷

内

與.

應 1=

大阪市

電

話

西

八四

OM

三八

七

る事となつた。

潮花君は本社宣傳部で活躍さ

番

港區市岡元町一丁目(電車道)

ラリと口をあいて餌を待つて

て吳れる人はないのかしらん やぢも並大抵ぢやないと思つ でないに違ひない。然し、お

燕の子が八羽ならんでズ

せざるを得ない。

子の數を聞いて目見得は

れかくしに無でたりして沈默

ゐるシーンを想像してみたま

おやちだつて、おたい

おやぢが菓子の包らしいも

ですよ、

などと氣安めみたい

末がお樂しみですよ、實物

からともなく、ぞくノ

と現

はれて來るのである。

子澤山燕を見ろとヘコマ

付けたら大變である。傳令の のを抱えて歸つて來たのを見

如く一人が飛び廻れば、何處

んな」と同情らしい事を云つ んがおたいていぢやありませ

て異れる。

全く、おたいてい

思はず撫然と

して、顔をて

は、

おやぢも

さら云はれる

愚痴を云ふ。 と女房はよく

あるんだ。

大抵な人が「そりやア奥さ

良かつたなとも後悔? だ、少し天理に反いてみれば

して

ればッて中々 又、居て吳れ ませんか

大變ですよ

天理だとあきらめて居るの 嚴然と天理は存す子澤山

「お佛壇へ上げてからだッ」

ると云ふ段取りになるのであ さらして適宜な配分が行はれ を一時喰ひ止める事になる、 から云ふのが彼等の襲撃

正宗が一本供

して貰つた。正月などに役者

つたが、

相當に豊富に過ごさ

森

東

魚

×

*

ひ起すと、聊クスグッたくも 年始廻りの兄の面影などを思 の小供のやらな姿をしてゐた をしてゐる、

顔の出る方が前さと簡易

ざるを得ない。 てゐる女の子達。 と云ふやらな姿で飛び廻つ

もので、 るが、子供の一人殖える度び 世の中には隨分努力家がある らめてみたりしてゐる。然し 分で、辯護してみたり、あき た人がある。 に貸家を一軒宛殖やして行つ 「敷が多過ぎるからだ」と自 十人近い子持ちであ と嘆聲を洩

切りの彼等。 ある。目の前にゐる自分の小 氷の配達みたいなナリ シャッとパンツ

全く苦笑せ

ららかな。 彈丸除けになると債券下

吉氏十月三十日夕刻逐に逝去さ▼三條東洋鬼君、神戸)の嚴父音

逝去された。御冥福を祈る。

れた。御気福を祈る。

債券などまで手の廻らぬ連中 の世迷言だらら。 なんぞは困る、 こんなのは

供の數だ! 秋だ、せめて愛國貯金だ、 超非常時だ、銃後の努力の

子のあたま數へ愛國貯金

大きくなれ。(完) して子供等よ、早くモリー おやぢよ頑張れ、頑張れ、そ

房が、それ見ろと云はぬ計り の驚をあげた。 らしたら「心掛ですよ」と女

女房の豫算鬼も角酒を消

つて永眠された。 お悔み申上げ悦子さんは九月十三日六才を以

▼河野夜王君(蟷螂主幹)の息女

た債券でも買える手はないだ の有様である、當ると極まつ 然し豫算は矢張り暗雲低迷

▼佐々木三福君(大連)は神戸の

▼阿部閑生君(大阪)の長男光男君が十一月八日亡くなられた。

君は大阪市住吉區天下茶屋二ノ魚崎七二八ノ一五へ▼齋藤勝雄▼杉原吟女さんは兵庫縣魚崎町

□鴨野町三○○ノ三一○(番地十六へ▼蟷螂川柳社は大阪市旭十六へ▼蟷螂川柳社は大阪市旭 變更)

蓬君は孤篷君の誤。 十月號各地柳壇十 四頁戶田

孤

オは湖鰌。▼松元正紀君は蕃兒▼ 野本乔水

君が當たられる事になつた。

君は、第一線に立たれてゐられ

君は、第一線に立たれてゐられ

濱田久米維君に委ねられた。路君は病氣の爲、同支部幹事を は野本潮鰌君と交迭された。 ▼川・雜港支部幹事丸尾潮花君 ▼川・雜廣島支部幹事福岡薬留 れ尚

*

· ·

か

B.7圆 A.10圆 ・シヤンプー ツ 1 • 附 屬 共

集 句

募

飛び降り

子 0

は

は

な

L

11 石

0

上 綠 雨

屋

屋上を踏みつぎにしてア 屋 ラ 屋 ンデ **.** J: 1= ブーだこは屋 12 天 統 in. 桶 部 上の知順 3 服 ۴ らずし 菊 は 15 0) 光 花 T 0 鏡 樂 水

選 屋 屋屋 屋屋 デ C Ŀ 上上 から見 で 0) で 出 ても L 12 み孝 ば で 淀 來てほ III 0) ひ 1) 金 75 まだ か 0 を 計 0 世 Š 止まず の借 將 T す る 姿 0 る 棋 比呂志 斗 颵 綠 春 不 木

屋屋 屋屋 六 屋 屋上へあがり 屋上の話題や 泣きやまぬ子を屋上へ 屋屋屋 Ŀ. 甲 J: J: 1: J. J. 0) 0) Ł は ナニ で で か 0 で 月 生 旗 隅 向 6 0 子 見 呆 で 見 で \$ 6 火の 3 心 b 0 風 ネ 1= す 0) 齋 ぱ 交 何 3 屋 向 オ 屋 窓 母 上 橋 手 L 6 \$ ン 叉 上 3 は 見 を te 支 連 7= 知 b 點 號 え 敎 近 那 n 親 ま H. 3 媚 12 か 面 で 惠 18 視 3 ~ 5 < 3 本 0) T 4. L 173 13 上晴 見 す 1= -白 な ま 111 > 3 0 6 れ階 せ 3 見 3 れ 12 L 話 みづほ 同水 可 文 香 楠 愁 雪 潮 松 双 風 E. 太 樓 虎 葉 月 美 花 春

づむ 童 水 巢 公 鉄 (天)屋上を降ろされて居るベルの (人)屋上へ出した葉鶏頭高(佳)屋上の鉢植水が足ら (地)金網を透 住)屋上へ來てさて云ひ出いる金の (佳)屋上へ來るまで二人 無 (住)屋上はよつほご暇な人に 佳) 豊休み屋 し屋上 Ŀ に 出 からのぞ T 氣 くの 82 5 言 が な見 岩 音 会 び L 事 りえ L 風 悠 文 7 曉 水 葉

ラ ヂ オ

風

ラヂオ ラヂオ體 ラ 體 ラヂオ 病 ラ 朗 一二三ラヂオ グデオ體 ヂ 操 ヂ 5 床 才 0) オ か で いてラヂ 體操するひご時 電 迄 競操の 朝 ラ 操 買 波 んな元氣だ k 動 は 閑 中 1= ヂ à. オ體操見 船 44 T オ 人 妻 ラ ŧ 0) ·5; 赤 體體 ŧ ヂ 起 H ŧ 2 才 操 操 紙 は \$ 朝 6 に は 0) 體 屆 無 す 朝 T を 11 で 操 ま U 我 る te 3 起 Z か な 5 ま 0) 专 元 告 3 \$ U ŧ L オレ 22 境 < 氣け 春 白 綠 不 水 4 石 葉 夢 外郎 巢 水 客 光 水 休 鉄 女 樂

ライト キラ 薬 庫 起 童 客 光 凹了 4: 有

樓

ヂ オ 體 操 T. 塲 は 健 康 週 間 斗 曉 童 風

選 ラヂオ體操こなりの 事 ラヂオ體操 ラヂオ體操手ご手ごふれて笑ひ合ひ 3. みんなし 黎 ラヂオ體 - 二 三 ラ 父も子も 秀)ラヂ 秀) 丸刈がラギ ヂオ體操に デオ體! 12 路 變 ヂオ體操女給寢むそな 明 二二 習 下 志 ツ 0) オ 車 0) 0) ラヂ オ體操馴れて週間 ラ 母も並 てラヂォ ラ 體 ラ ヂ ラ ラ ヂ ヂ ヂ 操 供 寢 ヂ オ オ オ體操り V 體 0) 才 着 才 0) オ 體 2 ŋ つく犬を持てきし 操 後 でラ 體 體 子 聲 1 0) 1= 操 ラ 人の 0) 3 ま 供 操 操 0) 子. で 合 が 1 朝 外さ 並 手 起 が 朝 指 ヂ ŧ 母: す 顏 ۴ ば なら 才 三の te 出 0) 面 t L te 深 導 で 遠 3 出 體 す T 白 掛 太 る 知 呼 to れ 來 硘 なり 3 3 れ å U 3 來 -5: 0 吸 L 操 3 る 0 よしみ 公 松太樓 風 はじめ み 鏡 づ ほ 水 九呂平 文 風 悠 同 同 愁 潮 雪 香 E. 樓 葉 葉 花 花 月 庫 春

協*川

大阪•心齋橋筋周防町角

經營•電南992

り四國 とゞまつた譯である、どちらに しても大阪柳壇は淋しくなる ★森東魚氏は十一月二十五日よ さきの支那行の話が四國で へ轉任される事となっ 製作中である。

山口倫子

は、金二曲屏風と決定 良伎翁古稀祝賀記念品 御賛同を得た、坂井久 して、目下三越 ★全國各地多數柳人の

益々御自愛され柳界の爲ガ

編

月十四日來阪された。 留守宅は從前通り。 ★張家口の岩崎松代さんが十 バラれん事をお祈りする、 尙

ラ

その大陸的なのに驚いてゐる。 も行かれる様だと、 される。まるで三越へ買物にで と云つた工合にチョイーへ來阪 寸寄りました。との事であつた が今度も電話で、 七月は京城まで來ましたので 昨日來ました 柳人間では この前の

> 百 京 阪 神 III 柳 0

軸)ラヂオ體

操

快

ゥ

大

週間 情

目下パンフレット JII 篡 ★會 場 大阪朝日新聞社三階 ★日 時 十二月三日(土)自午後六歳末の川柳味を味つて下さい! 中 阪 新 大 廣 間 大 廣 間 址 業團

ご妨本 天 Z 念撮 カーの 0) から 0) 影 11 居 雨臓物屋に灯のパンク天六暮れ 人 で < は 村 動 0) 陽 てこの 灯 れ かっる が 切段 \$ 入 ごかか 0 大 同 岡 同同 田 某 人

中 同同 同同 原 銃 人

米本貴志子

-

が 針

激 ズ

戰

0

跡

か

P

瓜

0) づか

花さ

注 武

射 運 0)

ラリ

並

んだ恐ろ

L 白 5

一人だけ塀にもた

れて留

居

商賣が軌道に

つた

借

0

コーラスが近

づ

11

τ

スワンを入

T 來

3 六 拙なく

還 な

3

1= <

れまし

漢 皇

口軍

道.の

笑

信 <

U

磯なれ松霧の

~

ールを着

T

L

3

0

0)

田

を

覗

\$

阪 同同石 同同同 田 天 その 松 資塚

["]

中でゲッチョが强いバイ廻」中神觸らぬ神に祟りな

U

か 榎

荒 な

松

江

田中

都之助

坪一圓見上げるやうなご こに

0

同 同

かき夢

を

0

0

竹

内

春

坊

り莚しし

同

茸

變

態

名 12

0) 撮 3 守

添

ぬ假

春 月 寫鏡妾酒折こ燈 宅 0) 斷 詰 管 死 者へ で 12 5 to 0) 寢 4. 慈悲 # 父を 顮 幸 ょ の鼻思 0 < て笑 か はず朝の すごい 0 0) 情

τ

征

<

弟

尼

酒

井

4

風

セパートを連れて步けばハピーエンド真白き紙に

散何

ら書

阪

步 te

し虫しこ

なら

は

夏

te

撫 お

7

茶

夜百

営する 舌の聲みじ

母が逢

機ひ起ったさ

來

機たる

同同

大陸

へ望

2 思

な

齡

をご

0 剧

で

初

80

知

0 4.

豫

備

沙

JII

唄

U

1=

乘

2

T

10

<

在

冶

文

庫

つて

守 T 0 ひ

衞

なる た で

0

b

0

F

雏

114

そう

か

靑 0)

春

譜

ラ、ンラン天津乙女は居

3

なり

手をあけてノーユーゲントは過ぎる

志戀

支 に

那 似

0) 1=

天 i,

地

を 专

吞

也 秋

夜

學 雲

大

動 な

82

0)

の秋 頼の H 所出 かるみんな見るの 眉つく 0 蘭 わかる 0) 定 3 3 5 鳴 尾

北

JII

春

巢

0

興奮

te

<

<

へきの

大

竹中ア

てた

手

が

體來り

12

宮長

井

公

名古屋 鈴 木 可

香

長 不 鬼 1, にして來 0) 水 のも 遠 が 0) 困 りま 1= は 1 b 筶 燈 日 2 す 交 な は ~て の U E の洗 手苦甲の増ひ話の 切 紙心山子え髪口心 3 大燙 媛 洲縣 0 L 植 甲 Щ

変なし子さんはするなり

襲 長

が 0)

解

3 るる

來れ

同

所子に

0

柿

変

85

<

な質になる

文夫に

挨拶が下手で課

椅

大 阪 同 同同 中 風 可 葉 洲

> 0 が

> 鐵 ば

> 砲 素

te 直 柿

L

T 貨

子つはけ

田 同同

龍奈 良 田縣 嶋 田 翠 峯 紹 仲 解 里

秋の色そのま・パレットへ高、野線村横切つて山高、野斗の散ば 酒いつか戀の点 介直决 所 年 te 遷 痛 专 田手か 含 をれ の派 ば Ш ~ 6 ナニ く 0) 勞 秋 手 る 1= はてエふれらるな市て 風 をに れあ残は台入 な知す 冬所り 6) りるれるり場 0 大 大

阪 阪 民 111 三十路 富 1:

同同山同同

野 洲縣 高 米 同同 峰 澤 柳 贈 明 兒

尼 崎 饭尾寄與史 同

同

天

小癪にも電車を抜いた。

役じろ

6

\$

22 見

1= た

父 0

グ

ット

サ 戾

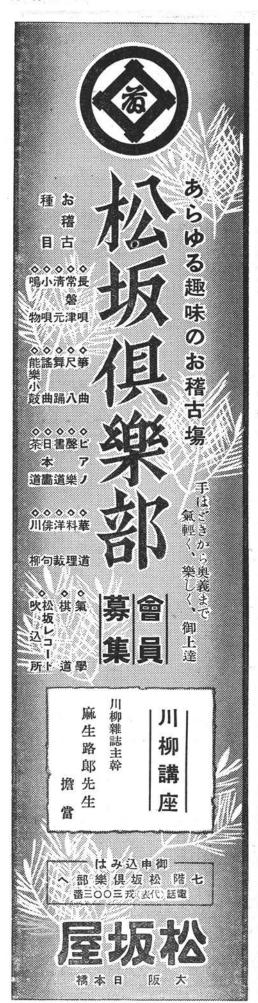
島 長谷川 秋史

0 0 原縣 **西野みづほ** 同同

Ш

南濃路

同同



死した父にまみへ てみ 切 賣 良徒釣 S. 15 登 0 香 銃 子 品洗 6 勢 母の がし焼 符 塲 白 ブ犬 3 が 3 に錢 後 3 te te 5 やへ で で 3 尾 な L 消 ts L 服 51 = 見 張 T 6 ほな ベ來車 空 \$ え が \$ 2. 0 1-洗 あに るびりる掌に 3 か振 賀 T T お L 1 母出 り載 れつ 0) 出且もな 淋 疲 掛 濯 酢 T 3 3 80 ス 女 見 るたきせ配橙るし那め 0 L 3 ~ 3 舘れけ屋房 竹巖 F 0 大 0 大 大 布 大 鳥原縣 盟 0 阪 0 阪 阪 施 阪 大森千代 掛 富 福井い 米谷松 谷 同野同 櫻 片 同 同 同 Щ 同 同 同 JII 本 島 JI] 飛 岡 本 Щ 佳 朱 神 不 吉 E 薬 鏡 太樓 づ 雀 鳴 樂 水 宜 人 香 光 水 ご近 父 沈 城 入重 朝雀 屋靴 足なる 沒船の 一役の癖も 别 ふきが 3 壁城 霧 報 6 上 所 0) 0) によ 1= の座は思ひ出を笑 6 0 夢 か ~ は まだ 舉 服 は 11 手の 7 Ŧī. £° 夜 秋 嫠 右衛門 ル ス が せ 知 ル 兄 2 は 勇武 18 墟 0) 算 知 思 カ ٢ で 5 0 郊 書 3 te L 歷 運 見 な な # 外の 0 る T 0 \$ 專 の北 風 にて 窟 ん L を間 す 0 せ ん 3 0) 上の 宮の は 中 3 留 0 故 亦 ^ T で 覺 1= 夕 あ あ 1= 17 な 不鄉鐵る陽順 守 3 3 1 8 否 3 1: 2 子 B 來 が T 5 U 服 うか百がを蔓部 B 氣 T r. 日か 御いかぶ度沈待紅隊 た 見云合 6 3 ス 章れ ょ 育 3 S V こ石 む ち 葉 長 飯ふぶ 5 トず 旗 3 L 女ち 竹廣 原縣 下 大 4 竹農 大 奪 0 大 大 原縣 關 阪 治 阪 躞 0 阪 阪 多田 戶 野 田同 梶 野同 長 吉田 同 黑 コ々村尙子 島 窪 III 本 本 野 田 市 大口 ち

末の娘が京

いの

難

te.

ぶか

テ野生給

\$ 植

で #

女

T

75

食

もい 病ん

>

で

旒

先

0)

4

オ

ル 線

一手飛車

蚊取

レヴ

ター

2 r

違

ふ特

陷

落

te

祝

3

T

こらへてる笑ひ

玩

具では パー

数せ

B 用 5 か

41

ŧ

0)

1

10 白 外だなぞこ

虚へ

服

風

3

b

な

年

3

樓

五 部社と

石

鉄

芳

郎

告

ま

す

湖

鰌

坊

替大阪七五〇二 雑 誌 通りテ呉、昭和 下さい 下さい (幾口でも) 和ビ

の意味で是非おつき合ひ下

そ荒一濱針異摩夕春居支釣ド れ驚錢の運性耶月三候那錢ラ もよし でも でも でも でも でも ~夏朝兵 は 君支つれも父見ひ並寢 强 をこ ものでた矢があるが、よりは新では、大がある。 支圖錢見りし額た屆 がし へ兵てな でがなせ君たこ征く 直さて緩の慰がき軍 ぜんぷ 雨 す過居廣こ問おし事志强出う かぎるけご文ち人便傳しし 京大大下大資神台 都阪阪関阪塚戸 灩 府 松 山沼山木池 國 田和石

芳

泉

大

尉

孤

簉

ゑ子

兄尾美 荷の雪呂悠

あ

る

句

を

創

九

理 豆 秋 郎

整

規濤稿投

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼投稿先は本社宛

*

本 社 + 月例 會

十月二十三日午後六時半 路郎、かほる、ライト、變人、い アキラ、艸樂、小柳子、默平、夕水客、鐵水、鮎美、葭乃、アート づむ、豆秋、孤篷、富士、巨人、 於 誓得寺

松茸の包ひ市 松茸が高値と思ふ土瓶むし 松茸の禮江戸ッ子で云ふてくれ 燗のつく間松茸焼 松茸が煮つまつて來で飯 松茸を食べていよく 松茸の香りへ君と久しぶり 上かんの湯氣松茸が白 いが栗も少りしそへた茸の 松茸のすきへ子のない 松茸の出る山らしい札 交を温む松茸めし 市場の窓 品かされ 夫婦ゐる 、秋深し とな は晴 いなり 10 か な 立 9 n 9 籠 る ち ライト かほる いづむ 互互變鮎双 アキラ 57 水巨 花 秋 葉 容

席題「下

駄

4

慰

慰

留守頼むつもり雑誌を置いてゆき 飼犬の背中へ留守の陽が當り 隣りの子留守を知つてる遊びよう 姑ら留守若夫婦と子供だけ 大聲で呼べば留守でないのなり (住) 留守番は何にもせずに疲れな 奥さんのお留守ほんとに寝てこまし (佳)妻使ふ癖不自由な留守をする (住) 留守番の返事があらい電話口 (軸)お屋敷の留守を葉雞頭美しい 「留 水 客 小柳子 かほる いづむ 水 4 鲇 孤 ライト 選 容 美 樂

内祝ひられしく 下駄が裏返り 誓文に買うた鼻緒へ台を買ひ 日曜の外出やつばり下駄にする 駒下駄を履かせて一枚寫しとき けつまづきそうな下駄なり内輪を 秋の雨の高下駄の音に親し 下駄はいて醉ふて居るなと意識を 一足に下駄屋は二人掛かりなり 大阪へ下駄にあとかけした女連れ 下駄の音嬉しい音になって 去に マルマンは庭一ばいに下駄を見せ 附で目 出度く歸へる表付 まら ライト 孤篷 かほる いづむ 豆 ライト 樂 美 秋

> 慰 郵

松茸に虫を見つけて値切る

松茸を大事にさげて醉

\$

て居る

で

き

松

茸

の君と僕

松茸飯子の食慾にあきれ

たり

眞 幸 慰

福に思ひ

慰問の歸り

いづむ かほる 眼がしらがあつく慰問の膝をおり 嬉 慰 書 (軸)定食の飯だけ残しい ム氣嫌 しさを涙で開く慰問文 問文女名前をらばい 出しは同じ様な慰問文 席題「慰 問」 合 O 默 鉞 水 豆

慰問萬才笑はぬ兵をフト見 慰問品せめて銃後の意 慰問品妻の意見も聞いて入 水害の地へ慰問隊急ぐなり 慰問文子供の方がらまくかき 慰問團兵隊さんに馳走され 足に豆出して慰問は わらはし隊慰問に行つて泣と來る 慰問品女としての氣を使 問品 問團元氣な負傷兵を見る 問 問文親が許してくれた 税の高さを云はぬ慰 品戦况添へた禮を受け 進軍の早さ引離し 駈け 氣を見 廻り 付 問 け アキラ ライト いづむ 孤 紫 豆 互同艸互鮎 人 水 答 香 士篷香秋 人 樂 人美

(佳)塗り下駄を履くに袂の端を持ち (佳)國策の下駄玄關で 咎めら タ鐘 かほる 選 慰問女子供に書かすとこ をあ (軸)目頭も熱く慰問の

母も入り

選

ライト

4

鐘

定食のお櫃のふたがすべるなり 定食へ削がそろふてホーク持つ 定食の中へ課長も割つて入り 長話し定食冷めたくなってゐる 定食のサンプル大きな海老が付き 定食のよいあんばいに醉ふて出る 定食の吸物少しこぼれて來 定食へ御飯が少し足らぬ氣味 妻と子は定食自分はビール 吞み 定食へ許しあつてる箸がふれ (軸)神戸下駄父は達者な足で行く 食へ銚子一本注 食を食べに阪急迄出 食に一本欲しい父がゐる 女し 掛け いづむ かほる 鮎 紫鮎艸巨 富 潮 紫 アキラ 選 美 鐘 秋 香美樂人 士花香 ٨ ちと派出になつて常着におろさる ふだん着を衣桁にある今日も留守 常着のまゝでレンズに

歡送に 隣りの子借りてそこ迄行く常着 風邪ひいてベルが鳴らない机にゐ 留守らしいベルはも一度押と見る 祭りの灯父を知らない 子の常 お目見得の女中常着をほどかされ 常着にもちよいと行にも本ゆらき 親しさへ常着のまゝのお茶をくむ ふだん着になるに女は背なを見せ エプロンの下は常着でない着 開幕のベルへ彼氏を待ちあぐみ 子も無らて淋しい家のベルが鳴り ベルよほど癇にさはつた響きやう 送る人送られる人ベルに泣 **發車ベル軍獣をかえて輪をつくり** 布團着で母の常着を眼に浮か **椒事局へ常着のまゝでついて行き** ふだん着に着換へて肩をたゝかも ふだん着のまゝで走つて義理を立て 席題 常着 ~ ル の上の 白 3 Ti. かほる かほる 鐡水 護鐵水豆 乃水客人 葭 潮 乃 花 變 7 鮎 鮎 か 變艸 豆默 B にほる キラ 樂 鐘

松山支部川柳忌句會 防空 井 大 (松山) 樓 報

征く朝へ友達の額みんな有戦争の話へ緊る兒童の 耳も目もハリキッテ居る防 防空へ父、母、子供部署に就 燈火管制月も雲間に隱れ 身體から銃後の心練つてお まされぬ事へ銃後の底 物へも一度 管 金をする氣釣銭別 0 暗 夜業の **一銃後氣** 派を 配 に溜 たり 響 空 < 3 力 b 瞳 8 陣 b 比沙思 向上庵 大曉五松五曉曉 童 葉調 健 童 明

す

廢

献

銃後の心、

家を出る

裏街の戀はやさしく言ひよられかざぐるま

デット・エンド

田舎から届いた餅のよくふくれ

梅田支部觀劇句會(大阪)

於朝日會館

煙の中に武勳の晴れ 芝居南京入城式で終へ

姿

昇天

玉

土筆坊

昇

玉

へ夫刷子のま」で立

難川 廣島支部句會(廣島)

九月二十三日 於廣鐵俱樂部 濱田久米雄報

軍事便近所の人も寄 かなめ

三浦屋の灯が揚卷にもの云は

せ

竹

光

軍事便來るが女給のほこりにて 職場の麥酒を一句添へてあり

同同 毬 同

ピストルを撃ちマーチンは空をむき マーチンへはだかはだしの子が並び

同同

軍事便見おぼへのある右さがり 校長がほめて聞かせる軍

事便

軍事便老眼鏡が曇 なつかしく軍事郵便かこま

るなり

中座 前

座

笛の子は銀貨一枚みつめるる

濁りが光る水に飛

U

鮎竹

美 光

親類を一廻りした 漢口見ゆ見ゆと筆跡躍つてる 軍事便赤ん坊にも讚み聞 配達の聲が大きい軍事 星一つ殖へた知らせの 軍事便君に子供があつたの 髭武者の寫眞も入れて軍 事便一家五人の眼を集め りも床し 軍事 軍 軍事 事 か 事 便 便か 便 便 4-H 白外郎 山秋蒼 至 宏 史汀 Ħ

の香

花

影にありて誰や若き名 水入りの助六廓の灯がきれい 道の傘が生きてる名科白 九月二十日 1を呼ぶ 同鮎 美

報 竹

軍

事便母の切り火の尊くも 撃に今太陽地をはなれ

軍事便地圖をひろげて母を呼び 軍事便支那のにほひがしそうなり 軍事便だまつて次へわたされる

社會式株酒麦本日大

青 白椿おとめの戀に落ちてゐる 子 が出 年 の唇にひとつの白椿 征 眞似て勇しくあり 同鮎同

ひろしまの白ひをこめた便り來る らたゝ寒へ日本刀を抱い てゐる 病床の雑誌の重味に疲れ切り 支那馬に乗り馴れ曠野親しめり 課長の目とどかぬ 机一つあり

旋の夢あり父も母も子も

同同同同

鉢卷を取れば昔の

友の顔

久米雄

義理を足す父白足袋を買ひにやり 新聞を濡れたまゝ見る朝の雨

鉢巻を解く手へ夕日の赤いこと

軍事便母に讀ませるための假 片假名へ片假名で來る軍事 軍事便支那語も少し書いて來る

久 秋 勇 米 史 記

働きに出る朝の膳いゝ包

O 名 便

白外郎

万 秋

酒井美知夫君出征激勵句會 九月十一日 於 美

V

砲煙の匂ひをのせた便りくる これからは便りが出來ぬ軍事便 水軍 軍 事便要は坊やをひしと抱き の見舞だけなる軍事 便忘れた頃の返書なり 軍事郵便、突擊 便 南濃路路 辛 同 鴨巴

皇

戰

親

突撃で別れたまんまそのまんま 傷病勇士傷痍快癒出征將兵武運長久 祈願川柳句會

突撃のしばし大地は忘れられ 眉宇すでに突撃の命待ちきれず 突込んで三人までは覺えてる

路同

突撃にちらりと見えた母の顔 弟の骨を背負ふて突撃す 突撃へ鉢卷ギュツと締め直し 突撃は一番罪をするつもり

毬

隊長をかばつてやをら立ち上り

の第一報の大活字 九月二十五日 戰捷、武運、全快、鳥居 主催 川・雜 今治支部 大山祗 神社

職捷へ勝つた名前を子にもつけ職 捷の 納 額に みる時代色 日の丸の行くては草を薙ぐ如し 勝いくさ守袋が復にある 勝鬨はお母さんへも聞かせ度 その中にトッチャンも居る勝いくさ 醉ふて濟まねど職捷の祝賀の 捷の報へ留守宅鯛を買 捷の秋譽の家は皆元氣 と子の 0 捷を譽の家へ先づ知ら 御笑み賜 は武運を 武運に光る日 祈る强 ふ勝いくさ い一音 本 O 五文虹石平文同曉同心同五同大 健庫一鐵尾庫 府 樓 健 童

雑誌一つ持つて寝に行く草 里の母お客にされて淋し 診察の順へ雑誌は惜しいとこ 古雜誌慰 靴と下駄ハハンと思ふ客があり 客扱ひにされて歸る勇士な **縁談の客とは知らぬピアノの音** なんとなく娘氣になる今日 阜へ雑誌の記事を パートのペンチの客は汚れて居 長室來客といふが婦人也 貨店食堂だけの客で行 問袋へよみがへり の客 かい 9 9 3 しげる 平同同銳同雨 同同銳雨

南同同濃路 美知夫 路 寄與史 南濃路郎 南濃路 同 美知夫 美 同 弁 雑念のサラリと消へた大鳥 全快 武魔運を 商用で來て鳥居から拜んど 成る程と太い鳥居を二人卷 親も子もだまつて通る大鳥居 全 傷癒へて戦地戀しい月を見る 舌に味あり全快の日近 皇恩無窮全快の身の歡 大鳥居くどれば心引き緊ま 鳥居際本家と書いたみやげも お鳥居の影落としてる土産 ほゝひげをそつて全快らしくなり 全快へ神護ですよと醫者も云 全快へ新の給が届けられ 全快のそれから怖いもの が出 盡忠報國武運は神に委せきり 武運あり我南京の地を踏め 快を祈る心を捨てまいぞ を敷 不武 保險 運を 武 運の中を縫ふ盲 運を語る國訛 の事も考へる 祈る旗が往く 神に委せき 運を笑 すり V. 合 喜 耐風子 文 晴 心 虹 平 曉 大 文大虹五大心大平晴心虹石女晴同

恒川

献立に吸ひつけられた五 家族連れ献立表に手間とらせ 献立が出來て會費で行きづまり 大掃除雑誌を見つけはかどらず 談に事よせ戀を明すなり 役會又雜談で終るなり 世帶學校仕込の献立表 立. 雜 に我好物をそつと乗せ 誌 新 代思ひ出 二六人 し錦 三 げる浦 笑 乃武路 しげる 同 錦 同平 Ξ

阪大川柳句會(大阪) 丸島利生

報

煙突のくの字に折れる橋の下 思ひ出は煙突にあるストライ 目標を煙突に取るハイキング 突が夜勤の窓にたば黑 場地どの煙突も威勢よし 煙突、股擦れ、雑吟、字引 牛 同 同柳君千 秀 女 秋

突に商工都市は凱歌あげ

香

失業の瞳に煙突の消えやらず 股擦れも秋季皇靈祭 残暑嚴しく 股擦れが悪化 脂肪過多股擦れをする年と 股擦れに賜暇の一日碁 股擦れは座席が欲しい滿員車股擦れで銃後護れと歸還され 股擦れは一足早く夏を知り 股擦れを云ふては居れぬ事が出來 廣告を兼ねた工場の煙り出し ハンストのページも飾る煙突よ 煙突の敷もたのしい新入社 煙突の數も讀んでる天主閣 股擦れを噛み殺してる騎馬巡査 を待ち で過し する なり 香附子 たけを たけを 同同同柳筑柳 利

秀 JII 秀生

いろは字引放せぬ年となりにけり

水

甲種合格ビールの味が分りかけ 生字引にされて榮轉後になり 慰問文虫の聲から書き始 病弱をたよられてゐるよい男 錐立てるやらに夕立河に落ち 戦況を聞く支那地岡が 汚 生字引時代おくれな事は知り ど忘れへ字引に頼ることしげく 大字典前にながめて假名で書き 類まれた弔辭辭典と首ツ 言海を出して教案やつと出 吾見の名辭引で探す父にして トランクヘポケット解書も忘れてず 母親をだます字引は大き過ぎ 字引と首ツ引の原稿とは知らず 燦然と憐れ字引はカバーの まへ 辭書だけが教へて吳れるエロチズム 給料日狙つたやらに新譜出る 殿様藝それ相當の椅子につ 大掃除辭書の塵から拂は を 略し新聞人を褒 れて れる 引 たけを たけを たけを 青一路 香附子 同 方 同春 利 同同同 利 同 方 柳 同 Œ. 巢 巢 秀 生正

> 薄. 薄

> > 薄給、アド、道寄、初物、 紅、黑子、煙 松坂俱樂部句 抄 白衣、

薄給で重質がられる書記があり 薄給の身には冷たしショウウインド 薄給の醉へば大きい事も アドバルン悠々として向きを變へ 揃ひ浴衣着ても薄給の肩寂し 道寄で思はぬニュース聞いて來る 道寄のやらに戀人やつて來る 道寄はそこまで來たと言譯 綱切つて空の漫步へアドバルン 薄給の目に國債のアドバルン 大室をくらげの様にアド バルン 道寄に都合の悪い連れが アドバルン下界は一人けつまづき 一とこは凹んでゐますアドバルン 學を出た薄給と親のぐち 給 給 給の上に氣象の多 もら 薄給だけが同情 れし就職第 いこと 出 11 步 ひ L 生々庵 美根子 美根子 白面人 白面人 耕 同 同 面人 簉 樂 菙 簉 莊 樂 莊

おしそうに八百屋初物出して見せ初物は頂く様に家内中道寄をした言譯はこの包 松 初物の値は聞くだけのものにされ 街に出た白衣は一人おもはゆし アナウンサー白衣いたはる際になり ドア押すと紫煙がゆらぐ應接 明日は明日の風が吹きます附け黒子 附けどこにまよつてゐるつけぼくろ 口紅の赤さに嘘を云ひなれる チョコレートたべて口紅ぬり直し 口紅のついたハンカチかりられる サナトリアム白衣に戀もあるならん 輪にふいた煙の行方を見つめてゐ ほくろさへ魅力のうちに敷へられ あきらめを黒子のせいにしてしまひ 人相を聞いてほくろに 難がつき 「煙ゆれてある人生は終るの 紅を 茸のはしり一片汁にうき 筋 燒 の煙も風情の中に入り 煙わびしき世 夫の好みに引直 帶 にて 3 美根子 美根子 生々庵 美根子 美根子 白面人 生々庵 美根子 白面人 孤肖 耕二 白面人 肖 子 生々庵 白面人 生々庵 同 肖



C - 9

征く人は唯日の丸を見るは 赤郷もうぼんくでない

かり

香附子 たけを

が過ぎて國寶拜

スフィンクスのそれ

方似て

IE.

股擦れのするほど肥えて借

家人

内會股擦れ同志馬

かい

合

々人の係關社 (順はろい)

主 藤國長長長田嘉笠片岡大長池 麻 助 幹 村枝野岡崎中納原岡本道谷澤員 生 牛 刑 史晴太柳辰 路直一弘二樂 路 部 作即濱耶秀二純生方平雄徹居

米川川龜小大大大沖鳥伊 末後赤穎藤 村村上井川西谷島野山藤 弘田井原本 吳五 岩 三花 濤三 一 彦 = 巖 卯 ん花太晟 清退之 太 馬菱郎修武郎村明郎歩造 郎-司鼓助

橋 本 森小藤蛭篠樂前前安篷高生谷田 林里子原谷田田川田尾方脇村 綠 魚人古二兩即鏈郎美樓雄即交介

春須大妹吉市村姫水北岩 奥永西福高 元崎西尾田場松田谷山崎★村田田田崎 没 里 山水 丹十种雨性 紀豆八變水食夢夕鮎悟柳 太秋步人車子裡鐘美郎路 路九樂樓る

岩大丸黑正鳥加近江原中石宮後西松 西曾岡藤 播坂尾川本生藤藤戸 5 3 お根 WA 双形潮紫水古ィ の史を民白青わ柳 虎水花香客弗ト勇る風む即峰兒を子

幹 5 部 支

支部 支支部部の 支部 支部 支部(支部(島根縣) 部(大阪市) 部(大阪市) (大阪市) (和歌山) (大阪市) (松山市) (鳥取市) (高知市) 岩 妹 江 酒 書 品 本 北 山 高 よ 山 本 島 森 子 大 織 之 島 義 永 彦 美 水 俊 処 人 る 複 州 助 の 成 人 谷山川見いわを わ双變人

西條 支部(大阪市) 今里 支部(大阪市) 今里 支部(大阪市) 今 里 支部(大阪市) 今 里 支部(大阪市) 今 里 支部(大阪市) 分 原 支部(廣島縣) 十 三 支部(大阪市) 店 島 支部(廣島縣) 十 三 支部(大阪市) 高 義 支部(慶島縣) 十 三 支部(大阪市) 高 養 支部(慶島縣) 十 三 支部(大阪市) 下 期 支部(廣島縣) 北 大阪支部(慶島市) 北 大阪支部(大阪市) (廣島縣) (廣島縣) (廣島縣) 英賀夫

▼ 柳大せ▼つ玉以支つ▼ \ 1主ねるが頭で柳日る穀立▼ はた酸監 採いて各た稿上家たそる幹ば、あさあ大類程だした幹を が 発して食たるはな来るれる會階だした幹を第一人 を選っい柳ろー多の本情に重をおがった。 を選っ、柳との一個報じを表した時を もとたりである。 は 一がのの個報といるとなりである。 もとたりである。 は 一がのののでは、 一がのののでは、 一がのののでは、 一がのののでは、 一がののでは、 一がののでは、 一がののでなどである。 一がでする。 のののでなど、 のののでなど、 ののでなど、 ののかをなてがある。 ののをなど、 ののかをなてがいまると、 ののでなない。 ででしていましている。 ででするのでない。 ののでないまたが、 ののでないまたが、 ののでないまたが、 ののでないまたが、 ののでないまたが、 ののでないまたが、 のででするのでないまたが、 のででするのでないまたが、 のででするが、 ののでないまたが、 のののでないまたが、 のののでないでは、 ののでは、 うる。康

御と年ものとは、 年もなり、 を関連をは、 の工程を関連をは、 の工程をは、 の工程を の

各地

柳壇

會

章

(評論研究感想吟行漫文漫勝)

华 羽 子

襟板

吉森

田

水

車

▲「川柳塔」への投句

魚

選選

家の雜吟を

夢る。

昭昭

和十二二

月十五〇

日日

發印 行刷

第十五卷

五第

發一

行就

第

十六卷

第二號

課

題

十二月

出出

締切

柳梅 每 先 居 號 (計2 対1時) 後塚 (十句以内) 麻 藤 越 集 生 青 Œ 路 郎 光 兒 選 選 選

べ鳥

▲文章は ▲締切は殿守され 各地會 信料封入の 一番體はなるべく楷 問合せはすべて 投稿其他につ 稿紙使用の事。 原稿紙 と対筒に朱肥の事 「川柳 に清記の事 報 二十字語原 私は牛紙別 誌原稿」 返卿

店會捌賣

石塚 (京都) 三宅 (冬 共他 市內 各書店 (東 共他 市內 各書店 (東 (東京) (東京) か、東京堂が、殿松堂 た。吉昭 (東京) か、東京堂が、殿松堂 た。吉昭 (東京) か、東京堂が、殿松堂 た。吉昭 (東京) か、東京堂が、殿松堂 だ。吉昭 (東京) かった (名古屋) 静観堂 ちき

(函 元書店

館

敞 轉 蒸 斷 無

> k 大阪市西區江戸 川 期上通

電 話 1 佐堀 月四 大器地(昭 和ピル) 社

三丁目三六番 生 幸 郎

麻

投句は本社發賣の 稿 規 定

*

*

紙口認 名雅號を明 に各種各題必ず別 曹又は同型の厚紙 投句用箋、官製薬 30 住所氏 肥する

「近作柳 榫 しは全作

第十

六卷

第

號課

一月廿日

締切

(十句以内)

募

集

價 定

半箇年前 年前金 金 部

、特輯競典》三四 (特輯號共)壹圖 金三 六十錢 件

料告廣 相談に應じますれど細川では本社へ直接御一 御一い

月線よりと御指示願ひます○轉居又は改號等☆節は苺新併記の事確實です○誌代受領は途本によつて御承知顧ひます御註文には何の御送金は揺替出座穴阪七五○五○番へな拂込みになるのが一番

Mil

辣發行印刷人

大阪市西成區玉出本通

800

及不朽洞會員に限 は川柳人協會役員

掘 替 央 阪

t X八八三 0---≡ 玉六六三 の四三三

福香香香

JII

錢

りどびきに



蚤

蚊

南京虫其の他毒虫でカ

1

樂

大評判の薬です。ゼヒお願めしたい薬!

この薬は美容薬としても大へんよく入浴後や洗電後等にお用ひになるせどても寒れば、ニキビ吹出物を防ぐのは勿論、キメが細かにツヤを増めれるので美容薬としてもなんに愛用せられてゐます。

にもとても便利な藥

最 粧 0 適 F \$6 T VC